



# 難民問題を理解するための五冊

佐藤都喜子

欧州を再びテロが襲った。ドイツのクリスマス市にトラックが突入し、十二人が死亡したのだ。犯人は二〇一一年にチュニジアから地中海を難民船で渡ってイタリアに入国し、その後ドイツで難民申請したチュニジア人の男だった。

ここ数年、シリアをはじめ内戦が続く地域で大量の難民が発生し、中東や欧州の地域不安定化につながっている。難民の多くは、シリア、アフガニスタン、ソマリアの三カ国出身で、周辺国のみならず、欧州にまで流れ込んでいる。これに対処するため、二〇一六年九月二十日に国連本部でオバマ米大統領主催の「難民に関するリーダーズ・サミット」が開催された。同サミットにおいて、安倍晋三首相は、日本政府の難民問題へのコミットメントとして、世界銀行の「グローバル危機対応プラットフォーム」に一億ドル（約一一五億円）を拠出することを表明した。また、その前日に開催された「難民と移民に関する国連サミット」では、難民支援に今後三年間で総額二十八億ドル（約三三二〇億円）を拠出すると述べた。

では、われわれが何げなく使っている「難民」とはどのような人々を指すのであろうか。難民の定義は、一九五一年に採択された「難民の地位に関する条約」（通称「難民条約」）で定められた。この定義による

と、難民とは戦争に巻き込まれた者というより、政治的意見や、宗教・人種・国籍・特定の社会集団といった個人の属性が理由となって迫害を受けたために、国外に避難した者をいう。しかしながら、本条約採択以後、人々が避難する原因は多様化しており、しかも複雑な要因が折り重なって移動を余儀なくされているのが現状である。その結果、旧来の「難民」に加えて、国境を越えて移動せざるを得ない他の多くの移動民が生まれている。このような状況下にあつて、難民問題を旧来の「難民」の定義にこだわらずに、近年活発化するヒトの国際移動という大きな文脈の中でとらえなおすことは、難民問題をより良く理解する上で意義あることと思われる。次に挙げる本はそのような観点から選ばれた五冊である。これらの本が、難民問題を身近に感じるきっかけとなることを望む。

## 小泉康一『グローバル時代の難民』ナカニシヤ出版、二〇一五年

著者は国際連合難民高等弁務官事務所（UNHCR）に勤めた経験がある。本書では、その経験を基に、現在起こっている難民およびまだ難民と認定されていない庇護申請者（以後、庇護申請者）の様々な局面をグローバルな観点から考察した。その結果、難民・庇護申請者の問題に取り組みには、人道的対応の基準となる「枠組み」の検証が必要である

と結論付けている。

国際移動を試みる人々の主な目的は、様々な脅威、不条理、機会の不平等、よりよい生活の探求などが複雑に絡んでいる。それにもかかわらず、実際には、従来の難民枠で他国での居住権を求めざるを得ないのが現状である。UNHCRは人権保護の観点から「伝統的な難民」を助けることを目的に創設されたが、創設以降の国際情勢の影響を受けて、このような「伝統的な難民」に加えて、帰還民、国内避難民、戦火被災民、庇護を求め拒否された人々といったような広範囲の人々を対象とした事業に取り組みようになっていく(一―二章)。しかしながら、先進国において難民認定を求める庇護申請者の入国条件は厳しさを増している。また、途上国に設置された難民キャンプにとどまった人々は先が見えない状態で長期的に滞留する傾向がある。このような状況の中で、暗躍するのはヒトを密輸する業者である(三―五章)。都市に流入する難民・庇護申請者も増えている。彼らが都市に住む理由は、より良い医療、教育、経済機会を求めることであったり、自分の存在が特定されたくないからだ。しかし、大半のホスト国は難民や庇護申請者に労働許可を与えていない(六―七章)。

難民問題が高度に政治化している現状、長期化する難民キャンプでの生活や都市に避難する難民・庇護申請者、さらには国内避難民などの増加を見ると、従来の援助では立ち行かなくなっていることが見て取れる。著者は、難民の法的地位や権利の再検討に加え、難民の「概念の範囲と境界を理解するための適切な分析枠組み」と難民そのものの定義の議論が必要であると訴えている。その実現のためには、著者が「将来的に」と言っている「国連平和構築委員会のような立場からの、一つの国連という主導性」が実は今こそ必要とされているのではないかと思われる。新たな国連事務総長には二〇〇五―二〇一五年の二期にわたり、国連難民高等弁務官を務めたアントニオ・グテレス氏が着任した。国連に過度の期待はできないと知りつつも、難民問題へのひとつの光として新しい事務総長の敏腕に期待したい。

## 柄谷利恵子『依存と生存——国境を超える人々の政治学』岩波書店、二〇一六年

本書は、単に物理的なヒトの移動だけでなく、モノ・カネ・情報・感染症・大気汚染などあらゆるものが移動している「移動の時代」としての現代社会の特徴を理解した上で、私たち一人ひとりが安全で平穩に生存していくために、どのような営みをしているかを再吟味」することをめざした意欲的な研究書である。

通常私たちはある国家の一員に属し、その国家の国民として様々な権利と義務が付与される。著者はこのような国家と個人との関係をシティズンシップという概念でとらえた。そして、シティズンシップには、定住(シティズンシップを保持する国の境界線内にとどまっていること)と安全(シティズンシップを持つことで、安全な日常に必要な保護がもたらされること)が結びついていることが前提となっているという。本書では、このシティズンシップという概念を使つて、シティズンシップが「移動の時代」にあつて変容するありさまと、それに対してわれわれがどのような対応を模索しているかを理論的分析と事例研究の両方から探求した。

本書は三部から成り立つ。第一部は、「移動の時代」のシティズンシップの変容について理論的分析を行っている。シティズンシップとは、すなわち「定住」と「安全」をもちあはさなければならないが、「移動の時代」に生きる私たちにとってはそれがもはや確実なものではなくなっていることを明らかにする。第二部では、シティズンシップがもたらすであろう「定住」と「安全」が期待できない現実の前で、個人がどのような行動を取っているかを事例を挙げて説明している。第三部では、国家を中心とした制度の下で、一国の安定・安全を求めるために作り出される国家もしくは多国間での移民・難民に対する管理制度の現状と、その状況に対応するために創出されつつある新たな制度展開について考察している。そして、最後に移動性を前提としたシティズンシップ概念の再構築が必要であると結論付けている。

現代社会において、国家が国家の成員にできることはそれほど多くないことは明らかだ。このような状況下では、著者がいうように、国境を超える移動は安全な生活を追求し、自らの生存を確実にするための有効な手段と言える。しかし、現実には「同じく国境を超える移住者の中で、国際的保護の対象となる「難民」と、保護の対象にならない「移民」が制度的に区別されて」おり、難民条約によって難民と認定される者に対しては、様々な保護が提供されるにもかかわらず、そうでない移住者に対しては、保護の方法や内容について国際的な合意ができていない。それゆえに、移動性を前提としたシティズンシップ概念の再構築が必要と著者の結論には説得力がある。実現には時間がかかるであろうが、難民条約にとらわれない人間の安全保障の枠組みを検討する時期が到来したのではなからうか。

### 墓田桂『難民問題』中公新書、二〇一六年

先の二冊の本は、グローバルな視点から難民問題を論じたが、本書は一国の立場から言及している。まずは、難民の定義から始まり、次に、現在特に世界が注目しているイスラム圏からの人々の欧州への流入に焦点を合わせ、送り出す側のイスラム圏の事情と受け入れ側であるEUで現出する課題について論じている。そして、これらの現状に照らし合わせた上で、難民問題に対して日本がとるべき道について一つの示唆を導き出している。本書は平易に書かれており、最近の動きも網羅しているので、難民問題の入門書として適しているであろう。

EUに流入する人々の出身国は、シリアが目立つが、アフガニスタン、イラク、チュニジアなど他のイスラム諸国も含まれる。彼らが移動するのはなぜか。イスラム創立当時の時代に範を求める過激思想、およびスンニ派とシーア派との対立といった宗教的側面から始まって、独裁体制なきあとの混乱や格差や貧困といった社会的側面など多くの要因が折り重なって彼らが移動していることが本書からうかがい知れる。これらの要因がイスラム諸国での政情不安を招き、人々の生活を困難にしている。

その結果、人々は安全で良好な生活が期待できるEUに流入する。受け入れるEU側は、流入する人々から難民申請を受理することを決定した。しかしながら、それが「密航希望者を生み、密航という形で多くがEUに流入している」。

日本が難民政策を考えた場合の取るべき道は何か。著者は、現実にくぐわなくなっている難民条約から日本は自発的に脱退し、日本独自の難民受け入れ策を検討することも選択肢の一つと思いつく。しかしながら、EUの現況を見ると、「難民個人を助けることは当人の「人間の安全保障」につながるのだが、それが一定数の規模となると、社会や国家の多面的な安全保障に影響を及ぼしかねない」という。そのため、「大局的な観点から、人道行動が日本にもたらす実益や負担、課題を見ていくことが重要である」といった慎重な姿勢を示している。しかし、日本は難民問題に対して全くの素人ではない。一度はインドシナ難民を積極的に受け入れた経験があり、しかも今や無視できない数の外国人が単純労働者として日本に滞在している。ここから教訓を学び取り、慎重を期しながらも、より前向きな姿勢で難民問題に取り組むことこそが、内向きな政治が勢いを増しつつある国際情勢の中で、大国の一員として「積極的平和主義」を推し進める日本が進むべき道ではなからうか。

### 小倉孝保『空から降ってきた男』新潮社、二〇一六年

ヒースロー空港近くで空からヒトが降ってきた。その場所は飛行機の経路となっていたことから、ヒトは飛行機から墜落死したことがわかった。落ちてきたヒトは若い黒人男性だった。

著者はこの墜落事故が起きる五カ月前に新聞社の特派員としてロンドンに着任した。英BBCテレビで「一九四七年以降、旅客機の主脚格納部に潜んで不法入国しようとしたケースは、米連邦航空局（FAA）が把握しているだけでも全世界で九十六人、亡くなったのはそのうち七十三人」であることを知った著者は「彼らが、命と引き替えにしてまでも手に入れたいものとは何なのだろう」との疑問を抱いた。この時から、

墜落死したアフリカ人男性の人生を追う著者の旅が始まった。死亡診断書によると、男性はモザンビーク出身の二十六歳（死亡した日が彼の誕生日）で、名前はジョゼ・マタダ。使用人か庭師。発見当時は普段着しか身につけていなかった。著者はロンドンのみならず、ジュネーブ、アフリカのモザンビークにまで飛んで母親を含めたマタダの関係者取材した。本書には、その結果として見えた移民問題の生々しい現実が描き出されている。

南アフリカのケープタウンでカメルーン国籍の資産家の使用人として働いていたマタダは、そこで、その家の息子の妻としてやってきた金髪白人女性ジュシカと出会う。そこから、彼の人生は予想だになかった方向に展開していく。ジュシカの話し相手になったマタダとジュシカの仲は急速に親密になっていく。そのため、二人の関係を怪しんだ夫に嫉妬され、理不尽な仕打ちを受けた二人は逃亡生活に入るのだが、そこでマタダを待ち受けていたのは旅客機の格納部であった。

今やヨーロッパをめざして多くの難民が命をかけて不法入国をこころみる。たとえ、目的地に到着したとしても、「難民」と認定されずに強制送還される可能性がある。それにもかかわらず、なぜこれほどまでに欧州をめざすのか。グローバルや国家レベルの視点で大局的に難民・移民問題を語ることは重要である。しかし、それと同時に、マタダの人生を通して見えてくる、自分の命を賭けてまでも欧州をめざす人々の気持ちやわれわれはどう受け止めるのか。便利で、常識が常識として通用する先進国に住むわれわれ一人ひとりが、「生まれつきの才能や勤勉さ、多少の運などでは絶対に越えられない壁が存在」している多くのマタダのような人々にヒトとしての温かさを差し伸べることが、実は地球規模の課題とまで言われる難民問題を解決する糸口になることを本書は気づかせてくれる。

安田峰俊『境界の民』角川書店、二〇一五年

本書は難民のみならず、無国籍者、少数民族といった国家と国家のす

キマに生まれおち、社会の周縁に追いやられて生きる民（著者は彼らを「境界の民」と呼ぶ）に光を当てたルポルタージュである。著者は日本に何らかの形でかわりのある「境界の民」を追いかけることにより、彼らにとつて大事なものは何かを見つけ出すことをめざした。そのきっかけについては本書を読んでいただきたい。

日本に住む南ベトナム系の難民二世。日本から「支援」を受けるウイグル人。日中両国にルーツを持つ日中ハーフ。日本語が流暢な教養人なのに、歴史に翻弄され、今や夜の住人となっている初老の中国人男性。台湾のヒマワリ学連。彼らへのインタビューを通して見つけたものは何か。著者は、「境界の民」がそれぞれ守りたいもの、それは「ブライド」と「アイデンティティ」であるという。すなわち、「たとえ国家が存在しない場所でも、彼らには彼らなりの誇りと自己認識がれつきとして存在する」という。

現在の世界は難民問題で大きく揺れ動いている。このような状況の中で、日本は難民問題に対してどう対応すべきか。一方では、国を追われ難民となってしまう人々を全面的に助けるべきだという意見。他方では、国家にもたらす負担や迷惑を憂慮すべきだという意見。現実には、その両極端の意見の間をわれわれは右往左往している。本書は、日本にかわりのある身近な人々を通して、単に「かわいそう」「たいへんね」という視点ではなく、彼らの大事なものを理解することこそが、今の時代にあつてこれまでに以上に必要とされていることだと訴える。「なぜなら、国家への尊重と、自民族中心主義を混同してしまう危ない考え——すなわち「傲慢」な要素を持つナシヨナリズムの広がりを防ぐ処方箋は、日本国家の周辺の「エラー部分」に住んでいる人たちの存在をしつかりと知ることこそ生まれてくる」と著者は指摘する。大いに同感する次第である。

(ついでに)